

各位

晩秋の候、平素は児童館事業にご理解ご協力誠にありがとうございます。

地域の交流事業が少しずつ出来るようになり、久しぶりにお会いする方々も増えてまいりました。

やはりこれなくては！と思うのですが、この三年間の生活が子どもはもとより、高齢者の方々にも今後の生活に大きな影響を与えていると感じる今日この頃です。

先日高齢者施設の方による「認知症サポーター」のお話を学童さんにして頂きました。

低学年の子ども達にはよくわからない事だたかもしれませんが、地域にはいろんな方が居ることを知り、目の前で困っている人がいても、少し手助けをしてあげればその方は自分の生活を続けることが出来る。そんなことを漠然とでも知ってもらえたら、中学、高校生になっても又、大人になった時に、いろんな方の「困りの手助け」が出来るのではないかと思つて取り組んでいます。

実は、地域に学童OBで障がいのある方がおられます。

彼もこのコロナで生活が大きく変わって戸惑っている一人です。彼の特性は道路や道端に落ちているゴミかな？（置いているのかもしれませんが）と思われるものが気になつて仕方がありません。それを警察に届けたり、知り合いに届けたり児童館に届けたりしています。

先日児童館に来たことを知ったお母さんが、お詫びに来られました。そこでいろんな事情をお聞きしたのですが、あちこちに迷惑をかけているので謝りに回っているとされました。私は少し悲しくなりました。

よくよく考えると彼は人に謝るようなことをしている訳ではありません。

良かれと思つてゴミを何とかしようと思つているようです。ただ、間違つたこともします。「置いてある」と「捨ててある」の見極めが出来ない事や重いとか自分が怪我をすることは本人は産外視です。ですから、傷だらけで児童館にやってくることもあります。

その時は事情をゆつくり聴いてみます。いろんなことを聞くと行動や流れが分かります。だから怪我をしたのね...。傷の手当てをしながら、これは良かったね、でもこれはダメだよと話すとい分かつた」と返事が返ってきます。

でもまた繰り返します。しかし、それが彼の出来ないところであつて、他のいろ

んな事は何でもできます。

私自身、年と共に見にくい、聞こえにくい、腰が痛い、瓶のふたが開けられない、等今まで出来てきたことが出来なくなっている自分に出会っています。

私もいつか思うように身体が動かなくなつたり、認知症になるかもしれません。その時優しく声を掛けてくれる人が居てくれたら...、少し手助けしてくれる人が居てくれたら私は変わらず皆さんと一緒に生活できるのだなと思うと、周りの方の支えは大事だなあとつくづく感じます。

もうすぐ「さのえがおワールド」久しぶりの開催です。

このえがおワールドとは、地域の子どもから大人、高齢者、障がいのある方全ての人が笑顔で過ごせる地域にしたいとの思いで始めたまつりです。

この名前通り、この嵯峨野地域で誰もが笑顔で過ごせる場所が、あちらにも、こちらにもあつたらいいなと思つています。

彼のお母さんには、いろんなところで「ごめんさい」ではなく「ありがとう」と笑顔で言ってもらえる地域になるといいなと思つて今回記事にさせて頂きました。

彼だけではありません、沢山の困り感を持つた方々がいます。

学校に行くのもしんどい子もいます。

そんな子ども達にもあつたかい声を掛けてくれる、

人に優しい地域であつて欲しいですね。

その為には、私たちは何が出来るのかなあ...

皆で考えていきましょう。

(尚、個人を特定する記事の内容は

保護者の方の了解を得ています)

令和四年十一月号のお便りに添えて

社会福祉法人 積慶園

京都市嵯峨野児童館

館長 飯吉昌子





